

職場で肝炎ウイルス検査を

がん社会 を診る

中川 恵一

ウイルス感染によって発生するがんの代表が肝臓がん
で、原因の7割近くがB型、
C型の肝炎ウイルスです。

B型肝炎ウイルス(HBV)は感染力が強く、輸血の他、母子感染や注射器の使い回し、性行為など、さまざまに感染ルートを持っています。

HBVの保有者(キャリア)のうち10〜15%が慢性肝炎を
発症し、さらに一部が、肝硬
変、肝細胞がんに行進します。

日本の肝臓がんの約15%はHBVが原因です。

肝臓がんの原因の6割近くを占めるのがC型肝炎ウイルス(HCV)の感染です。このウイルスは、コロナウイルスと同じく、一本鎖RNAウイルスの仲間です。このウイルスが血液を介して感染すると、肝硬変や肝臓がんにつながります。しかし、輸血用血液からのウイルスの除去が進み、このウイルスによる発がんは減少に転じています。

すでに感染している人でも、「抗ウイルス剤」によ

て、HCVはほぼ100%体内から排除できるようになっています。

C型肝炎の特効薬は、副作用がほとんどない飲み薬で、米メルクの「ラゲブリオ」、米ファイザーの「パキロビッドバック」といったコロナ治療薬にも、その開発技術が応用されています。

HCVの感染があっても、なるべく若い年齢でウイルスを排除すれば、肝臓がんの発症リスクを大きく低下できるようになりました。

B型肝炎に対する飲み薬も普及しており、発がんリスクを抑えられるようになっていきます。

2009年に制定された肝炎対策基本法により、保健所や指定医療機関でB型、C型の肝炎ウイルスの感染の有無を無料で検査できるようになっています。

しかし、働く世代の肝炎ウイルス検査が停滞しており、問題です。労働安全衛生法に基づく定期健康診断で毎年、血液検査が行われますが、肝臓機能に関する検査項目はあっても、肝炎ウイルスについての項目はないためです。職場での肝炎検査は全労働者の5%にとどまっています。

とくに、C型肝炎では、成人になってからの感染はまずありませんから、毎年の検査は必要なく、一生に一度の検査で十分です。

新入社員の入社時や、5歳刻みの年齢の血液検査に、同意の上、肝炎ウイルスの項目を追加するのが簡便だと思えます。

肝臓がんは毎年3万8千人以上が罹患(りかん)し、2万5千人もの命を奪っています。5年生存率も36%と難治性のがんですから、その予防はとても大切だと言えるでしょう。職場での肝炎ウイルス検査の普及が強く望まれます。(東京大学特任教授)

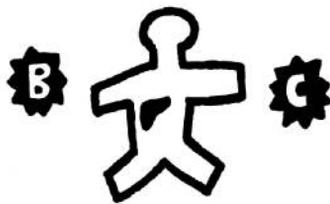


イラスト 中村 久美